



避難先ムジャ地区での生活再建の夢に向けて、力を合わせるマラナオ、マギンダナオ等マラウイ出身のイスラム系民族の女性たち



2023年7月25日発行

NPO 法人ビラーンの医療と自立を支える会

(英文名略称・HANDS)

本部：〒227-0033 横浜市青葉区鴨志田町 516-11

TEL & FAX: 045-500-9151

E-mail: hands-mindanao@nifty.com

<http://hands-mindanao.a.la9.jp/>

郵便振替口座 00210-5-72693

加入者名：ビラーンの医療と自立を支える会



マラウイ難民の居住地ムジャの収入向上プロジェクト

— イスラムゲリラISと政府軍の戦闘から6年 —

5月下旬、「ムジャ地区に今もとどまるマラウイ難民の収入向上を図りたい」という主旨で、果樹栽培や貯水タンク新設等に関する申請書がPIHS代表のナプサさんから届きました。荒れ地の草取りや手作業での整地作業など、苗木植栽の準備を進めるモロ民族の女性たちの写真も添えられていました。

2017年に起きたミンダナオ島西岸マラウイでのイスラム国/ISと政府軍の戦闘。ナプサさんたちは医療チームとして緊急支援を行うとともに、助産所に隣接する



ムジャ地区で難民の一部を受け入れました。一方、私たちもPIHS経由で届く各種ニーズに対して、「定住できる緑豊かな地に・・・」「ヤギと水道プロジェクト・ムジャ地区近況報告」「ムジャ・コミュニティースクールの現況」等のタイトルで随時報告のように、継続的に支援をしてきました。

幸い紛争地マラウイではほぼ治安が回復、復興も進展したようで、難民の帰還が徐々にすすみました。幼稚園教育を担ってきたムジャ・コミュニティースクールでは、そのため定員に空きができて、近隣に在住のビラーン民族やイスラム系のサンギル民族等、公立校が遠くて通えない子どもたちの受け入れが進んでいます。

一方、難民は故郷マラウイでの生活再建の見通しがつかないため、引き続きムジャに滞在し、この地域で生計を立てると決めた家族も10世帯余りいることがわかりました。

しかし、当初私たちが支援したヤギ飼育事業は繁殖がうまくいっていないようです。今回受領した申請書によれば、今後は1年から数年以内に現金収入が期待できる果樹栽培を軸とするため、苗木、有機肥料、農具を購入し、過去に支援した地下水くみ上げ装置については、その電

源をソーラーシステムに変更し、貯水槽を新たに設置する計画、及び支援要請になっています。

思えば、私たちHANDSが活動を開始した時期は、モロ民族弾圧ほか強権政治を行ったマルコス政権はすでに崩壊し、ラモス大統領の時代でしたが、山岳部では未だ共産ゲリラとイスラムゲリラ、政府軍の小規模な衝突は繰り返されていて、各種支援事業モニターで山の村に向かう途上、「早く山を下りたほうがよい！」との警告を受けるケースに遭遇した経験もあります。

ちなみにサンギル民族であるナプサさんの家族や親族は、1970年代、マルコス政権の戒厳令の下、厳しいモロ民族弾圧政策により、故郷のキアンバ町を離れ、現在地のジェネラル市郊外に逃れ、定住したと伺いました。

今も続くウクライナでの戦闘、南スーダンの内戦他、日々、戦闘で失う命や新たな難民が生まれている世界情勢の中で、何とか、平和を保っているミンダナオの状況に安堵しています。また、6年前のマラウイの戦闘で、各地に移住を余儀なくされた避難民が、ミンダナオ最後の国内難民であることを祈りながら、このジェネラルサントス市郊外のムジャを終のすみ家と選択した避難民の支援について、6月開催の社員総会の席で、議論させていただきました。

すでに活動の収束に向けて舵を切った状況ではありますが、新たな難民支援の財源として用意している予備費の一部を充当する件について承認いただきました。感謝とともにご報告いたします。

小規模NGOとしてできることは限られていますが、特に私たちがかわる地域の人々、一人ひとりの命の重みに思いをはせて、また、長く支えていただいた会員市民のご理解とご協力を現地のニーズに適切につなげることができるよう、今後とも、現地との連絡を密にしながら活動を続けたいと思います。

(山崎)